

## アメリカ家政学の系譜—学会誌分析— (第10報) 被服学・住居学

榎アキハトイヌ ○渥美美晴、椋山女学園大生活科学 東珠実、

金城学院大短大 古寺浩、名古屋文理短大 鈴木真由子、

三重大教育 吉本敏子、西遠女学園 藤田亜子、静岡大教育 村尾勇之

目的 本研究は、これまでにみた通り、アメリカ家政学会誌にみる家政学の研究内容の歴史的分析を通して、家政学の本質を探ろうとするものである。とくに本報では、家政学における生活環境に関する領域として「被服学」と「住居学」に注目し、両領域における研究論文の特徴に基づきながら、その歴史的系譜について明らかにすることを目的とした。

方法 1909年～1989年の JOURNAL OF HOME ECONOMICS(724冊)及び1972～1989年の HOME ECONOMICS RESEARCH JOURNAL(76冊)における分析対象論文5,765本の中から被服学 584本、住居学 237本を対象とし、①被服学の論文を衣生活、被服材料、染色、被服整理、被服衛生、被服構成、服飾意匠・色彩、被服心理・服装社会、服飾美学・服飾史、被服教育の10領域に、住居学の論文を住居史、住生活、住居管理、住宅問題、住居デザイン、室内環境・設備、構造・材料・設備、居住環境の8領域に分類した。②各領域の論文数、構成比、キーワードなどに基づいて、年代ごとの特徴とその推移、類似性などを明らかにした。

結果 ①被服学に関する論文は、全体の約4分の1が衣生活に関するもので、これに次いで被服材料、被服整理、被服心理の論文が多くみられた。領域構成の特徴や類似性に基づく、被服学研究の歴史は、1910～1950年代のモノとしての被服の性能や管理重視の時代と、1960～1980年代のヒトにかかわる被服心理やデザイン重視の時代とに二分された。②住居学については、室内環境と住生活領域の論文がそれぞれ全体の約4分の1を占め、住宅問題の論文がこれに次いだ。住居学研究の歴史は、室内環境や住宅問題等が重視された1910～1930年代とこれらに加えて住生活が特に重視された1940～1980年代に大別された。